

モイモイのモイ

(一歩一歩のたった一歩)



バスがシェムリアップに近づくとき、朝から降り続けていた雨が止んだ。濡れた雲と淡い残照が調和して辺りは深遠な空気に包まれた

ポルダリングのきつかけは
給水タンクの故障？

キムスロイが妹の結婚式に出てほしいと言った。軽いノリでOKしたが、場所がコンポンチャムと聞いてびっくり。遠いなあ。ほとんどプノンペンまで行くのと変わらないじゃん。早朝スムロント、ミニバス、モトドップ(バイクのタクシー)を乗り継いで、国道からメコン川沿いに悪路を北

上、夕方やっとキムスロイの実家へ到着した。小さな村から人がはみ出そうなほどに盛大な結婚パーティが始まっていた。キムスロイと父上が僕らのテーブルに来て、たぶんただ一人の外国人招待客である僕に何か挨拶をと、言った。ビールで呂律が回らなくなっていたが、なんとか壇上に立って、うっかりくたばれ、結婚式とつぶやいたら、スムロンは通訳できないとペソをかいてし

目指せ、 アンコールクライマー誕生!!

まった。ゴメン、君の良識に任すから、まっとうな祝辞を並べてくれ、と頼む。

翌日、雨の中を1日中バスに乗ってシェムリアップに戻る。夕方、雨が上がると濡れた空の小さな裂け目から淡い残照が水田を照らし、あたりは深遠な空気に包まれた。夜、奥さんとレストランで外食して家に着く。玄関を開ける。嫌な予感。顔が濡れたような気が。ん？目を凝らすと、嘘だろ？って、いう感じで2階の踊り場から、水が滝になって落ち、視界を遮っていた。ポンプが壊れて、屋根にある給水タンク(高架水槽)がオーバーフローしたみたいだ。手がぐりで庭にあるポンプの電源を落としてから、携帯電話の明かりで家の中を点検。クライミングギアの詰まった段ボール箱が、床を覆った水面に揺れているのを、僕は呆然と見ていた。

翌日、CAN(アンコールクライマーズネット)YOUTHの子供たちを、ちょうどよい機会だからと調子よく言いくるめて、みんなでロープやシューズのクリーニングを実習することになった。クライミングシューズはリンスとシャンプーを使うと皮を傷めず洗えると聞いていたが、やってみると確かに悪くなかった。ギヤを庭で干している間、子供たちとクライミングのDVDを見る。日本のルートを登る平山ユージと、インドアコンペのムービー。コンペでは終了点での大フォールの映像が繰り返し返され、みんなの目を釘付けにした。翌週、僕は12月のアンコールカップの決勝を想定して、最上部でのランジやダブルダイノ(※)を試してみた。子供たちが壁の下で騒いでいる。どうやら彼らの関心をつかんだらしい。終了点直前に大きなフォールをするとすごく見栄えがするんだ。さらにラオスを回ってきた日本人のビジターが、これに火をつけた。彼(ゆう君・若江勇一さん)がリード壁に設定したポルダ課題にANCN YOUTHの全員が夢中になった。彼らの飛ぶ距離はどんどん伸び、テクニカルなムーブに集中し始めた。

(続く)

※クライミング用語で飛びつくこと、ジャンプ。ダブルダイノは両手ランジ